

大学共育と平和学 ～学生が平和のための 学びの主人公になる(上)

愛媛大学法文学部 教授

和田 寿博



1963年兵庫県生まれ。日本平和学会会員。戦前戦後の企業経営を専攻し、戦争体験記録に取り組んでいる。学生の広島・沖縄・韓国・中国・台湾などでの平和友好の旅を支援している。

はじめに

2004年の法人化を前後して、愛媛大学では主に1・2回生が受講する共通教育科目が設置された。私は共通教育科目の「地域と世界」などの授業を担当し、主に平和学を副題とした内容を扱っている。2017年度の場合、主に1回生約1700人のうちの450人が受講する最大の授業になっている。本稿では、平和学を基礎に戦争体験記録や平和友好の旅に取り組む学生の様子を紹介する。

1. 大学改革と平和学の開講

1990年以降、私は大学院生としての専攻研究のため、戦後初期の日本企業や所轄官庁の関係者を取材して戦前戦後のことを聞くようになり、1994年に愛媛大学に任用されてからも、今日まで四半世紀の間、戦争体験記録に取り組んでいる。

2000年当時、学生の社会的関心は、箱物公共事業や産廃・リサイクルなどにあった。2001年2月10日のえひめ丸事件、同年9月11日の米国同時多発テロとそれに続くアフガン・イラク戦争、2005年の戦後60年、さらに日韓ワールドカップや韓流ブーム、朝鮮半島情勢、北京五輪などを背景に、学生は「戦争と平和友好」に関心を強めた。2003年と2004年に私が担当した共通教育科目では、えひめ丸事件やテロと戦争について、学生の関心が高まり、私自身、「学生が戦争と平和に関心を持つのか？」と不思議に思いつつ、学びの機会を提供するようになった。

2004年には松山市在住の元高校教師で、1944年に海軍に志願し、終戦時に山口県徳山で人間魚雷「回天」乗員として訓練を受けた男性のお話を聞く機会を設けた。15歳だった彼は軍国少年として海軍飛行予科練習生に志願したこと、なれない訓練と暴力により意志を喪失したこと、戦争末期にもかかわらず戦死を覚悟したこと、戦後は山村の自宅で放心の日を送ったこと、復学した学校で禅や哲学書にあたり、演劇を見て人間性の開放に目覚めたことなどを話した。学生は彼の戦争体験に強い関心を示し、私が戦争体験を知る機会を中心とした平和学の授業を開講するための大きなきっかけになった。

2004年秋、次年度からの共通教育科目に関し、学生のニーズに応えた授業改革が求められ、「平和学はどうか？」と呟いたところ、担当教員から「是非、やってください」と激励され、心細いながら準備をした。

こうして、2005年以降、私が担当する共通教育科目として半期15コマ(2単位)の「平和学」を開講している。

その内容は日本平和学会の知見と戦争体験の記録をふまえ、「おじいちゃ

ん、おばあちゃんの戦争体験を聞く」ことが特徴である。これまでの授業では、60歳から93歳の戦争体験者をお招きし、戦前戦後の暮らしや家族・学校・地域、出征と戦場、勤労働員・学徒動員、空襲、被曝、海外事情、復興、父・兄弟や家族・知人・友だちの死、学生に伝えたいことなどをお話いただいた。またカンボジアなど海外の紛争地の訪問や東チモールで平和構築に取り組む人、日本でシリア人の難民支援をしている人の経験をお話いただいた。学生は強い関心を持ち、真剣に聞き入り、感想を述べ「ありがとうございました」と感謝を申し上げるようになった。

戦争体験者の多くは、ご自身の体験を子や孫に話したことが多く、匿名希望の場合もある。「今、伝えなければ」「二度と繰り返さたくない」との思いで、70年前のことを詳細に話される。人間の記憶の底深さとそれを生み出す強烈な戦争体験への思いを感じる。

学生の多くは入学までに戦争体験に接することがない。しかし、平和学と戦争体験記録に取り組んだ学生は次のような感想を述べている。「戦争の要因を知り、どうすればなくなるかを知りたい」「戦争はよくないと思っていたのに分からなくなった」「自分のことだけでなく他者の意見も聞くべきだ」「どの人とも仲良くなるのが大切」「学び暮らせることはありがたい」「子どもたちに学ぶ機会をつくってほしい」。それぞれに真剣で、関わりを考える感想だ。

2005年5月、「平和学という聞き慣れない講義が始まった」と地元メディアが報道し、今治明德高校矢田分校など子どもたちの活躍もあって、平和学は愛媛に定着しつつあると思う。中高生の時、報道で興味をもったという学生も生まれた。

市民から「偏向しているのではないか」「軍事学を扱え」というものから、「高齢者の昔話を聞かなくて福祉みたいだ」「傾聴ボランティアだな」などのご意見をいただいた。あるおじいちゃんの自宅に招かれ、手を握られ、「あなたは良いことをやると」と何度も繰り返された時は言葉がなかった。学生はおじいちゃん、おばあちゃんの体験を聞いたがっているのだから、それに応え、3世代を繋ぐのは2世代目の大人の責任だと考えるようになった。

2. 平和学の共育と成果

ところで、なぜ学生は平和学の授業に関心を持つのでしょうか？

第1に学生の戦争体験者のお話を知りたいという声に応えることにある。松山市出身者など受講生の多くは、これまでに戦争体験者のお話を聞きしたのは、小学校の修学旅行に行く前のたった1時間の「平和学習」の時間しかない。広島出身者の場合でも原爆攻撃が主な内容である。戦争体験者のお話は生々しく、その生の声を学生は知りたがっている。松山空襲でも、広島原爆でも、沖縄の地上戦でも、大陸からの引き上げでも、まして戦場での元兵士としても、多くの人が死傷し、自らも奇跡的に生きた人たちだ。その光景を再現はできないが、体験、教訓を伝えることは大切なことである。

第2に平和学の授業内容が平和を思考するとしても、その授業方法が非平和的では本当の平和学とはならない。学生同士が学生生活や戦争と平和について感想を交流する参加型の共育を工夫し、授業に真面目に取り組むとともに



平和学の授業で戦争体験を聞き紙芝居を上演
講師：加藤澄子さん（80歳）

に、思ったことを表現できるように人間同士の信頼関係を実現できるよう工夫をしている。そのためにはアイスブレイクが重要である。現代の学生は授業を無難に過ごす傾向があるが、これでは試行錯誤や失敗を重ねて真理を探究することはできない。そこで、平和友好の観点から歌や舞踊、チャンゴ(朝鮮半島の代表的な打楽器<太鼓>)、カチャーシー(沖縄の手踊り)、太極拳、サルサ(キューバの民族音楽をもとにしたラテン音楽に合わせて通常ペアで踊る)などを取り入れ、多文化理解を並行して進めている。学生の対話や思考の条件は学生の気分が解放されることだと考えている。

半期15回の授業は大づかみで次のように構成している。

4月の開講後には平和学の授業のついでにメディア報道や前年の元受講生の取り組みを紹介し、大学で学ぶことのイメージを共有する。

5月の連休前後には、子どもの文化に携わっておられる宮野英也さんと加藤澄子さんをゲストとして招聘し、ご自身の戦争体験やお父さんの戦死、自身の従軍体験などのお話、戦前の国策紙芝居『七つの石』や戦後の紙芝居

『白旗を掲げて』など、子ども文化を通じてお話を聞く姿勢をつくってゆく。5～6月には「おじいちゃん、おばあちゃんの戦争体験を聞く」ことを特徴として、愛媛の空襲、戦争中の紙芝居、原爆症認定訴訟、徴兵・従軍、アジアの戦争被害などの体験をもつゲストを招聘し、お話をお聞きしている。学生は「戦争体験者のお話聞けてよかった」「この講義にはまる」といった感想を寄せている。

7月には学生はそれまでの授業や戦争体験のお話を踏まえ、多様な発表を行う。探求型研究としては、戦争の要因、軍隊の仕組み、戦時中の学校・生活・地域の様子、地域の空襲、貧困と戦争、核軍縮の展望、憲法論争、基地問題などが紹介される。また実践型探求としては、戦時中の食事づくり、防空頭巾製作、竹やり訓練、バケツリレー、広島平和公園訪問など、真摯な取り組みをしている。なお、いわゆる戦争の加害や戦争犠牲者の追討と和解については、1回生後期に開講する平和学や海外研修「平和友好の旅」で扱っている。



えんたいごう
掩体壕(戦時に航空機を爆撃から守るために作られた防空壕)を見学し
元第343海軍航空隊偵察第四飛行隊員の解説を聞く
講師: 杉野富也さん(92歳)



平和学の授業で松山空襲の体験を聞く

以上のような授業の成果として、学生は次のような感想を述べている。

「自分のことだけでなく、他人の意見にも耳を傾けるべきだ」「戦争はいけないものだと思っているのに、他人の意見を聞いてわからなくなった」「戦争の原因を知り、どうすればなくなるのかを知りたい」「もっと外国の人と仲良くなるのが大切だ」「憲法九条と自衛隊について考えたい」「松山空襲の時に先輩たちが学舎を守ったことを初めて知った。私たちの学校も戦争と無縁ではない。」「平和があってこそ私達が学び生きていけることを伝えたい」「戦争や平和について大学入学まで触れる機会がなかった。子どもたちに平和のことを学ぶ機会を作ってほしい」「岩国や沖縄の基地再編を自分の問題として考えたい」

愛媛大学の平和学に興味をもっていただけただけでしょうか？平和学という授業ですからこそ、大学の授業にありがちな、一方通行、上位下達を何とか克服したいと工夫している。



平和学の研究発表で
思いを表現する

【紹介】

私と平和学受講生、元受講生、市民が取り組む行事を紹介します。詳細はHPを参照ください。

■ 第9回戦争遺跡保存ネットワーク四国大会 in 愛媛

<日程> 2018年6月2日(土)～3日(日)

<開催地> 松山市北吉田町など

*松山市南吉田町にはアジア・太平洋戦争当時に建設された松山海軍航空隊の軍用機を格納する掩体壕が3基ある。2016年3月、松山市議会は掩体壕1基を文化財指定する請願を採択し、今年3月、松山市は保存を決定した。請願を提出した松山掩体壕を考える会は、今後、掩体壕を戦争の悲惨さ、平和の尊さを伝える文化財として活かしたいと考えている。

■ 第48回空襲・戦災を記録する全国連絡会議松山大会

<日程> 2018年8月25日(土)～26日(日)

<開催地> 愛媛大学

*同会の目的は、「アジア・太平洋戦争において米軍が行なった日本本土攻撃(空爆・艦砲射撃などすべての作戦を含む)及びそれによる被害等の実態・真実の解明・研究・語り伝え等を目的として活動する団体・個人の連絡・交流を目的とする」(規約)ことにある。今夏、第48回大会を松山で開催し、学生・教員・市民・全国からの参加者が松山・愛媛・四国・瀬戸内ならびに日本全体の空襲・戦災を考える。(http://kushusensai.net/)